

伊丹公論

復刊
第4号
通巻23号

発行所
伊丹市立図書館ことば蔵
伊丹市宮ノ前3-17-14
☎072・784・8170
編集
伊丹公論編集委員会

芥川賞受賞50周年

輝き続ける田辺文学

今年、伊丹大使ことば蔵名誉館長である市内在任の作家、田辺聖子さんが芥川賞に選出されてから50周年になる。そこで、田辺さんの出身大学である大阪樟蔭女子大学国文学科の中周子教授(田辺聖子文学館副館長)に寄稿いただいた。こぼ蔵は田辺さんの全作品を収蔵している。これを機に魅力あふれる田辺ワールドに触れてみてはいかがだろうか。

田辺聖子さんが、平成二十二年に日本文学の継承と発展に大きく貢献したことが認められ、文化勲章を受章されたことは記憶に新しい。今年、田辺さんの第五十回芥川賞(昭和三十八年度下半期)受賞の五十周年にあたる。



田辺聖子さんの作品を展示している伊丹作家コーナーことば蔵

受賞までの田辺さんの人生は順風満帆ではなかった。昭和三年に大阪の福島で写真館を営む裕福でハイカラな家庭に生

まれ、十代の頃から大学ノートに短歌や詩や小説を書き、クラスメイトに回覧するという文学少女だった。しかし、次第に戦争は激化し、大阪樟蔭女子専門学校に進学するが、勤労動員により十分には学べず、大阪大空襲で生家は焼失し、敗戦の年に父親は亡くなってしまう。

優秀な成績で総代をつとめた卒業式の帰りに、金物問屋に就職してから八年間、母親と弟妹との生活を支えるために懸命に働く。戦後の混乱期であったから生活の苦勞は並大抵ではなかった。夜は家庭教師としても働き、休みは月に二度しかない中でも作家への夢は諦めなかった。懸賞小説に応募する日々を送り、入賞が度重なったのを機に退社。昭和三十年から大阪文学学校へ通いはじめ、昭和三十三年には初の単行本『花狩』を出版する。

母親と弟妹との生活を支えるために懸命に働く。戦後の混乱期であったから生活の苦勞は並大抵ではなかった。夜は家庭教師としても働き、休みは月に二度しかない中でも作家への夢は諦めなかった。懸賞小説に応募する日々を送り、入賞が度重なったのを機に退社。昭和三十年から大阪文学学校へ通いはじめ、昭和三十三年には初の単行本『花狩』を出版する。

小説の舞台は関西の放送局で、登場人物たちはテンポの良い大阪弁を饒舌に話す。当時、毎日放送のラジオ制作部で台本を書いていた田辺さんの体験が活かされた設定である。「大阪弁で恋愛小説は書けない」と考えられていた時代である。「大阪弁でサガンのような恋愛小説を書きたい」という田辺さん会心の作である。

主人公は自由奔放に恋を楽しむ三十代のシナリオ作家「有以子」。彼女の相談相手、シナリオ作家仲間一回り以上も

年下の「僕(ヒロシ)」の視点から、有以子の惚れっぽくお人好しで愚かだが憎めない姿がシカルに描かれてゆく。そんな彼女が共産党員の「ケイ」と恋に落ち、社会主義に生きる高潔な男性と思ひ込み結婚を決意するが、裏切られてしまう。傷心の有以子がヒロシと共に朝を迎える最後のシーンは虚しくて哀しい。

選考委員の石川達三は「その新しさを軽薄さと評することは容易だが、軽薄さをこきまで定着させてしまえば、既に軽薄ではないと私は思う。これは音楽で云えばジャズのような、無数の雑音によって構成された作品であり、そのアラベスクの面白さは「悲しみよ今日は」を思い出させる。(中略)感傷旅行はたしかに今日的な小説であり、今後こうした作品がふえてゆくのではないかと賞賛している。受賞後、田辺さんは驚くほど多様な作品を矢継ぎ早に発表してゆく。ご家族の話では「まるで、そば屋が出前の注文を受けるように」すべての執筆依頼を引き受けられたという。単行本だけを数えても既に二百五十を超える作品を書かれた田辺さんの口癖は「手持ちのことは増やさない」ということである。「一つの事をいかに色々」ことばで表現できるか」が大切だということである。田辺文学の世界が実に幅広く豊穡である所以を物語る言葉である。

移り変わりがあつたということでありま。つまり元禄時代は甘めのお酒が重宝されていましたが、江戸中期、後期と幕末の慶応へと時代が下るにつれ酸味のある辛口系になっています。時代背景や生活環境の変化も大きく影響して来ていることが味覚の変遷からも読み取れる面白さがあります。

田辺聖子文学館
大阪府市東区西4の大阪樟蔭女子大学小坂キャンパス(近鉄奈良線河内小阪駅から西へ徒歩5分)図書館内にある。芥川賞の正賞であるオメガの時計や少女時代の作品が寄託・展示されている。「田辺文学を読む会」も開催。
問い合わせは同図書館 ☎06・6723・8182へ。

第3回

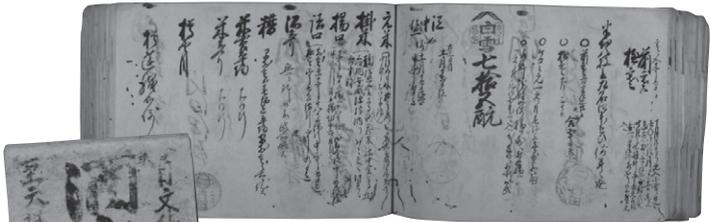
小西酒造社長特別寄稿

伊丹と酒造業の歴史

古文書から見る酒造業

今回は小西家、小西酒造株式会社並びに伊丹酒造組合が所蔵する近世古文書を基に江戸初期からの伊丹の酒造業が織りなす歴史の面白さについて述べさせていただきます。これは古文書の話だけではなく、「本質とは何か」を先人たちに教えられたのではないかと考えています。

まずは自画自賛のようですが、全国的に江戸時代の約250年



「酒永代覚帖」(伊丹市立博物館所蔵)

間(元禄から慶応)にわたるお酒の造り方の記録(「酒永代覚帖」)が全て残っているのはこの伊丹だけあります。文書記録保存の重要性に早くから気づいていた先祖・先輩諸氏に対し尊敬の念を越えた畏敬の想いで一杯です。もちろん、それを残し続けてきた歴代の当主や番頭さんが素晴らしかつたということに加え、様々な天災や戦火を潜りぬけられた幸運にめぐまれたこともあります。これらの古文書は、いろんな意味で現在生きている我々への教訓になることが多くあります。

まず貴重な古文書が残っている物理的な問題として和紙と墨の文化の素晴らしさがあります。あの阪神・淡路大震災の時に地下室にあつた古文書が水に浸かつてしまったところがありました。和紙に墨で書かれたものは乾かせば元に戻つたと言われています。もちろん、和紙にも欠点があり、湿気や虫食いは弱いかもしれませんが、その対策さえしっかりしておけばよく、墨も優れもので文字が消えたりしておりませんでした。ひるがえって現在のコンピューター時代において短期間で方式が変化する記憶媒体ほど不安定なものはないという認識を強く持たねばなりません。つまり記録を継続的に永く残すという意識が最重要であります。さらに「酒永代覚帖」や「伊丹本店と江戸店との往復書簡」などから読み取れることは、江戸時代において既に酒に対する味覚の

次に情報の重要性に関する感度の良さが挙げられます。現在は地球が小さくなったとも言われるほど情報が瞬時のごとく世界を駆け巡っています。しかし驚くことにインターネット等の無い江戸時代であっても、伊丹から江戸の情報を月に2回飛脚のやり取りで得ていたということとは、いかに情報収集が重要であるかということを先人たちは気づいていたのです。

「芥川賞受賞50周年記念イベント」
誕生日はことば蔵で「おもてなし」

ことば蔵名誉館長、田辺聖子さんの芥川賞受賞50周年を記念して、ことば蔵では6月10日から1年間にわたり特別イベントを実施する。このイベントでは誕生日の属する月にことば蔵に来館した人を対象に、田辺さんの著書から引用した言葉を入れた特製パスカードをプレゼントする。その他にも自分が生まれた日の新聞の1面のプレゼントやことば蔵の

各階に設置している大型ディスプレイを使ったお祝いサービスなどを受けることができる。

このイベントは、来館する3日前までに電話または来館による事前申込が必要。中学生以上は誕生日を証明するものを提示してください。申込期間は平成26年6月1日から平成27年5月31日まで。

問い合わせはことば蔵へ。

文化財ボランティア大忙し

官兵衛人気で 利用者倍増



「官兵衛所用の銀白檀塗合子形兜」(もりおか歴史文化館所蔵)



来訪者を案内するボランティアら(右端奥) = 有岡城跡で

NHK大河ドラマ「軍師官兵衛」の放送が今年1月から始まったことに伴い、官兵衛が幽閉された地として知られる有岡城跡を訪れる人が急増、市文化財ボランティアの会が案内に大わらわとなっている。

同会は、有岡城跡や猪名野神社、昆陽寺などの文化財・史跡を組み込んださまざまなコースを用意し、事前申込を受けた5人以上のグループを対象に無料で案内している。

「軍師官兵衛」の放送開始が知られるようになった昨秋から利用者が増え始め、前年度492人だった9月〜2月の総利用者は1003人と、2倍以上となった。高齢者を中心とした50人〜200人ほどの団体が多く、中には官兵衛ゆかりの福岡県や大分県、東では愛知県あたりからの団体もある。有岡城跡では「官兵衛が幽閉された場所はどこあたりですか」と尋ねられることが多いという。同会幹事の細川勝海さんは「忙しくて人の手配が大変ですが、伊丹の文化財にこれだけ関心を持っていただけるのはうれし。市内の飲食店や土産物を売る店の利用も多く、経済効果も出ていますね」と話していた。

市文化財ボランティアの会に関する問い合わせは、市教育委員会教育課 ☎072-7848090へ。

郷土史こぼれ話④ いま楊貴妃 荒木だしの薄命

NHK大河ドラマ「軍師官兵衛」で、村重の妻だしが大河ドラマ史上初登場し注目を浴びている。演ずるのは桐谷美玲。だしは、大阪石山本願寺の武將の娘で「いま楊貴妃」と、朝廷役人の記録にある。これまで書き残すのは珍しい。何故、本願寺の縁故者が妻となったのか。私の調査では、次の様に考えている。

その頃本願寺は、寺院の存亡をかけた織田信長と激しい戦いを繰り広げていた。そのさ中、元龜2年(1571)内部で異変が起きた。その責任を取らされた武將が、下間頼総とだしの父、川那部左衛門尉である。本願寺を代表する2人の武將は追放され、また自害した。

川那部家には3人の姉妹がおり、何らかの手引き(堺納屋衆か)で村重に引き取られた。その長女がだしである。村重はその頃三好三人衆に属し、反信長方であった。信長に臣従したのは引き取って2年後の1573年だから、問題になることはない。そのあと村重は本願寺を敵として戦った。しかし天正6年(1578)には信長に反旗し、今度は本願寺と連携して有岡城で戦う。1年後城は落ち、捕虜となった。だしは、京都の六条河原で従容として処刑された。もちろん、三人姉妹とも死に際には美しく群集は涙した。

薄幸な人生を歩んだだしの歌碑が、有岡城本丸公園にある。だし24歳。妹2人の名は残されていないが、15歳と13歳という。信長の怒りは凄まじく、荒木一族の処刑は、斬首・張り付け・小屋に押し込めての焼殺しと、信長三天虐殺の一つに数えられる。「おびだしき御成敗、上古よりの初めなり」(信長公記)。戦国時代は、このような時代であった。

(郷土史研究家 森本啓一)



世界で一冊の本 ZINEを作ろう

米国で生まれた「ZINE」(ジン)と呼ばれる手作り本がある。文章やイラストを書いて自己紹介の本をつくったり、写真を張って思い出を書いたり、出版社と関係なく個人で好きなように作る小冊子だ。専門的な技術が必要としなくても、誰でも手軽に自由につくり発信できることが魅力。

本から始まる恋物語

4月23日は何の日? 日本では「子ども読書の日」だが、遠く離れたスペインでは「サン・ジョルディの日」

(ZINE 部部长 鹿嶋孝子) デジタル時代だからこそ、暖かみのある手作りのZINEが恋愛の手助けになるかもしれない。今後、プロポーズや子どもの成長記録など、ZINEの活躍する場がたくさんありそうだ。

「子ども読書の日」だが、遠く離れたスペインでは「サン・ジョルディの日」

れている堺達朗氏を講師に迎え、一緒にZINEをつくりその場で印刷、製本している。ワークショップには、子どもから大人まで幅広い年代の多くの方々の参加がありZINEづくりを楽しんでいた。完成したZINEはこぼれ蔵に展示してあるので、紙ならではの温かさ溢れる素敵なZINEを是非手にとってみて頂きたい。そして、ZINEづくりの楽しさ是非体験して頂きたい。

ことば蔵では、「サン・ジョルディの日」に合わせた限定の恋愛イベントを4月20日に開催した。このイベントは、自己紹介用のZINEを自分の手で作り、作成後のフリートークでZINEを使って自由に交流・交換するというものだ。

平成いたみ八景④ 伊丹・長寿蔵・夜景

べていた。最盛期には、その数は八十軒ほどだったという。

江戸では伊丹酒は將軍家の「御膳酒」ともなり、「丹醗」と呼ばれ極上酒としての地位を保持していた。そして伊丹(酒の香に誘われて、西鶴や頼山陽を初め多くの文人墨客が大坂道や西国街道を通じて訪れて、俳諧などの文化の花が咲いた。特に山陽は「剣菱」「白雪」など伊丹の酒を飲んで以降、伊丹の酒以外は飲まなかったと言われている。

とくで李白の「月下晩酌」などから見ると相当昔から、独り酒があったのだろうが、我が国では、経済的に余裕ができた武士や町人の晩酌が広がったのは江戸後期頃で、一般的に家庭で晩酌をするようになったのは、明治以降であろうか。若山牧水の「白玉の歯にしみとおる夜の酒はしずかに飲むべかりける」の世界は、山陽の時代には無かったのでは。山陽も多くの達人と談笑しながら盃を傾けていたのではないだろうか。

街灯に照らされた酒蔵の横を通ると、「日本外史」について語っているのだろうか、山陽の明るい声が聞こえるような錯覚を覚える。清酒発祥の伊丹には酒蔵が良く似合う。市民が八景に選んだのは当然だろう。

(いたみアピール推進協議会会長 山元龍治) ※次回は「夜の大坂国際空港(伊丹空港)」を紹介予定。



伊丹は清酒発祥の地である。江戸時代には井原西鶴の「津の国のかくれ里」の一文にあるように、舁屋・丸屋・油屋・山本屋・稲守屋など多くの酒造家が軒を並

初企画 日本一短い自分史

最優秀に御願塚の村上さん 双子出産の驚きと感動描く

ことば蔵はこのほど、「一番輝いていた自分」をテーマに日本一短い自分史を募集、最優秀賞に御願塚5、村上貴美子さん(67)の「我が子に幸あれ」を選んだ。



村上さんと3人のお子さん
(昭和53年1月撮影)

この企画は福井県丸岡町で募集している「日本一短い手紙」(一筆啓上賞)を参考に初めて実施。昨年7月1日から12月26日まで募集し、市内外から計33点の応募があった。

審査員は永吉雅夫・追手門学院大学教授、中周子・大阪樟蔭女子大学教授、坪内稔典・佛教大学教授の3人。優秀賞は以下の6人(敬称略)。西山亮一(宝塚市)、稲本真由美(伊丹市)、小南一(川西市)、加藤学(伊丹市)、加藤八重子(伊丹市)、柳沼繁(伊丹市)。

村上さんには賞品として1万円分の図書券が贈られる。最優秀作品の全文は以下のとおり。

「まだお腹の中に一人残っていますよ。」とベテラン看護婦さんの声。「えっ、本当？嘘でしょ！」と私。

「こんなに大きなお腹して一人のはず無いでしょ」と、まだ盛り上がりついでのお腹をぐるぐる撫でている看護婦さん。

「……、晴天の霹靂」とはこのような時のことを言うのだろう。想像だにできなかった一大事である。冬の真夜中、二男を出産し、産みの苦しみを終え、ホッとしたのもつかの間、身動き一つ出来ない無様な恰好のまま、次の陣痛が起きるのを待たねばならなかった。「もう一人がお腹の中にいる？」信じられない思いではあったが冷静だった。

それにしても、先生は妊娠中になぜ双子だと知らせてくれなかったのか。いや、一度だけそれらしきことを聞いた覚えがある。七ヶ月の検診の時だったろうか、笑いながら冗談のように「お腹、ちよつと大きすぎるから、ひよつとしたら双子かも知れないね。ハハ」と。全くのジョークと思

れないうち、先生もそれっきり双子のことは何も言わなかったではないか。でも確実にもう一人いるみたい。ならば次は女の子がほしい……。だんだん激しくなる痛みの中でそんなことまで考えていた。約二十分後、二人目も無事出産。「今度は女の子ですよ」と言う看護婦さんの声に「嬉しい！ああ良かった。」と思わず反応してしまつた。

翌朝、二つの小さなベビーベッドにのせられて部屋へ来た我が子達の其々のカードに男児二五三〇グラム、女児三〇五〇グラムと記入されている。交互にじっと見つめているうちに「よし！やるしかない」とファイトが湧いてきた。かくして私は充分に考える暇も与えられないままに、堂々たる双子の親となつてしまつたのである。家では、まだおしめをして一歳八ヶ月の長男が待つており、その後でんやわんやと語れば限がない。昭和五十二年一月のできごとだった。

現代人物風景



寺西菊雄さん



写真協力=西田写真館

日本のバラ育種の先駆者である寺西氏がバラと出会つたのは中学生の時。戦後まもなくリノリウムで財をなした東洋リノリウム(現在の東リ)の創業者、寺西福吉氏の子の致知氏が開園した「伊丹

バラ色の人生

ばら園」に一族としてお手伝いをするようになった。そのうちにバラの魅力にとりつかれ、「天津乙女」「マダムヴィオレ」…百種以上のバラが寺西氏の手により送り出された。

本はもとより世界中に愛好家がいる。作り出したバラが各地に広がり、それぞれの地で愛されていることが喜びだと語る。渡欧した時、公園で丹精込めて作り出した「天津乙女」が咲いているのを見た時は本当に嬉しかったという。

「バラは、手間ひまかけて交配することによって様々な色や形を作り出すことができます。時間をかけて自分の思い描く花が咲いた時は本当に嬉しくなります」。寺西氏の作るバラはすべて格調高く気品があるため、日本はもとより世界中に愛好家がいる。作り出したバラが各地に広がり、それぞれの地で愛されていることが喜びだと語る。渡欧した時、公園で丹精込めて作り出した「天津乙女」が咲いているのを見た時は本当に嬉しかったという。

(村上有紀子)



株式会社よびこ堂

〒664-0857 伊丹市行基町1丁目108番地 ☎072-777-1212



は武士だったそうなので、先祖は荒木村重とも同じ時代を生きていたことになった。記録ではその後、いろいろな商売を営んでいたことが分かつてる。

現在の種苗・園芸店の前身である盆栽屋を始めたのは昭和14年(1939)。種苗・園芸店では以前からホームセンターなどの競争に晒されているが、そのあたりについて乾さんに尋ねてみると、

「ウチは信頼できる生産者が作った苗を購入し、適正な価格で販売している。他

代まで遡る。初代から伊丹暮らしで元

(満田弘樹)

おいしいさ七ツ星



粉モンにはソース。その発祥は昭和初期の京都で流行した一銭洋食に始まる。そして遅れること数年、七星ソース創業。以来80有余年、地ソースメーカーとして伊丹(西野)で商ってきた。「伊丹の各家庭に一つ、七星ソースを」

を掛け声に、お好み・たこ焼き・ウスター・とんかつソースはもちろんのこと、ぽんず、蒲焼のたれなど和風系の調味料にも強いのが売りだ。そして、社内外のアイデアを形にした数多くのコラボ商品もモブづくりのこだわりから生まれたものだ。懐かしい味のする「ソースせんべい」は三喜屋、「昆布だしぽんず」は悠美食品と。最近では川西・伊丹名産のイチジクを使用した「とんかつソース」、東野のマイヤーレモンの果汁を使った「レモンの塩ぽんず」、すごいアイデアだ。それだけではない、1月には独身男女を集め、とんかつならぬ「コンカツソース」を使った焼きそば教室も開催されるなどイベントへの出展も多い。後継者がなくやむなく廃業するソースメーカーも多い中、

(齋藤芳弘)

伊丹俳壇

坪内稔典選

最優秀賞

ママになるぶくぶくぶくぶくはるのかぜ
ミニわさび (尼崎市)

最優秀賞に選んだ句は、人間が生物であることを春風の中で実感的にとらえています。「ぶくぶくぶくぶく」というオノマトベが生々しく、しかもおかしい。

俳句は何を詠んでもいいのです。今の時代の言葉で、大胆に575音の「言葉の風景」を紡いでください。優秀賞の句の「EDIONもAEONも飛んで春の風」は2つの店のチラシが春風に飛んでいるのでしよう。もとも、そうだとすると「春の風」よりも「春風」「春疾風」がよいかも。季語「春風」はそよそよと吹くおだやかな風、いわゆる春風駉蕩の気分をもたらします。

優秀賞

食卓に花びら連れて朝戸風
鳥越 世史子 (伊丹市)
あんまやを出て春風とちよつと行く
諸富 千歳 (伊丹市)

うそばっか。じょーだんばっか。春の風
渡邊 美保 (伊丹市)
恐竜のしっぽの化石春の風
小松 房子 (伊丹市)
EDIONもAEONも飛んで春の風
田中 智規 (伊丹市)

「伊丹公論 名物コーナー」の「伊丹俳壇」。

今回の兼題は「風」。風をテーマに様々な句が集まった。今回も市内外から多くの応募があり、遠方からは、新潟県や静岡県からも応募があった。
また、今回も11歳、86歳と、幅広い世代からの応募があり、老若男女からの俳句人気の高さが窺えた。
「伊丹俳壇」今回の兼題は



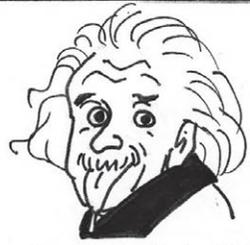
坪内稔典プロフィール
愛媛県出身。立命館大学卒。2001年、第9回句集「月光の音」で第7回中新田俳句対象スウェーデン賞を受賞。2010年、「モーロク俳句ますます盛ん俳句百年の遊び」で第13回桑原武夫賞を受賞。佛教学教授、京都教育大学名誉教授。柿衛文庫也雲軒塾頭。第2回ひがし商店街五七五大賞選者でもある。

タンジョー先生

はやしやよい



ジーン・シモンズ



アイン シュタイン



林やよい…伊丹市在住。大学4年生の息子、20歳の娘の母。毎日新聞阪神版にイラストエッセイ「くるまいますまいる」を連載中。

カエボン

あらししべ長者

今回から新連載「カエボンわらしべ長者」をお送りする。この欄で紹介する本と、ご自分のおすすめの本を交換してくれる人を募集して、次の号ではその方に本を紹介していただいて…と数珠つなぎ風に進めていくコーナー。

まず最初の一冊は、カエボン部長がおすすめる本。鎌倉幸子著「走れ！移動図書館」（ちくまプリマー新書）。

著者は、カンボジア・タイ・ラオスなどのアジア地域をはじめ、国内外で救援活動をしている「シャンティ国際ボランティア会」の広報課長。彼女が中心となり東日本大震災の被災地で行っている「移動図書館プロジェクト」の、立ち上げから現在までの活動の記録だ。

震災直後の炊き出しや物資配布は、生きるために必要不可欠な救援活動だが、「こんな時だからこそ、本が、本の中にある一行が与える影響ははかりしれないものになるのではないか」という思いに支えられ、震災の直後から現地に入り、被災地の図書館や書店を調査、事務所の設置から車両の確保、本の選定を進め、移動図書館の運行を開始する。

読み進めると、何度も胸を打つフレーズに出会う。「本は生活に必要な情報を伝えてくれます。自分の感情を引き出してくれる言葉を伝えてくれます。主人公に照らし合わせて、困難を乗り越える希望を与えてくれます。安らぎを与えてくれます」。

被災地の方にとって「本」とはそれまでの日常を取り戻すもの。改めて「本」とはエネルギーの塊であるということを感じさせてもらった。

老若男女、いろんな人に「本の持つチカラ」を感じてもらいたい一冊。
(カエボン) 部長 三波由希子



今回の紹介本『走れ! 移動図書館』とおすすめ本交換をしたい方はことば蔵へ。

ケータイを持ってから

元おかみの気まぐれコラム

10年前、子どもがケータイを買ってくれた。2年ほど家に置いていたが、何のためのケータイなのかと言われ、仕方なく靴に入れていた。毎年、桜の時期になると花見をしていた。仲間が花よりだんごなのであります。そろそろ帰り仕度です。
ない。えー。うそー。ケータイが無いのに気が付いたのは朝の五時頃、近所のKさんについてきてもらう。昆陽池公園にごみのコンテナが置かれていた。ごみの中に入り公衆電話から電話をかけてもケータイは鳴らない。そうだと警察に届いているかも…案の定無かった。奥さんお酒くさいですねと言われちよつと恥ずかしかつた。まだ酔っていたのか

英語註釈日和

先日、大好きな英英辞典 Oxford Advanced Learner's Dictionary (略称 OALD) 第4版をあちこちと散策していると、時節がら次の一文が目にとまった。
spring (n) / the first season of the year (in which plants begin to grow), coming between winter and summer, ie from March to May in the northern hemisphere
spring (春)の説明。まず、nはnoun(名詞)のこと、ieはラテン語id estの頭文字で、英語ではthat is to sayとかin other wordsと言い、「すなわち、言い換えれば」という意味。直訳「1年の最初の季節(植物が成長し始める) 冬と夏の間に来て、北(northern)半球(hemisphere)では3月から5月まで」。英会話的にはSpring comes from March to May, and plants begin to grow then.と応用のきく素晴らしい例文。さて、March(3月)・April(4月)・May(5月) 三役揃い踏み格好のことわざ(17世紀中頃初出)がある。A windy March and a rainy April make a beautiful May.
直訳「風の3月と雨の4月は美しい5月をつくる」。windyはwind(風)の形容詞形でOALDにはwith much windとありrainyはrain(雨)の形容詞形ですぐ前のを活用すればwith much rain.わざわざmuch(多量の)があるので、しょっちゅう風が吹き雨が降る状況。beautifulは、美しいという意味だが、ここでは上述のplants begin to grow が隠し味のように効いていて、花が咲き乱れ草木の新緑という感じ。意識すれば、「3月は風が吹き荒れて4月は雨量が多ければ、5月には草は緑で花盛り」。純和風諺訳「弥生疾風、卯月霖雨で、皐月繚乱」。

が毒だからでなく、すばらしいが故にうい飲み過ぎるからだ。
なんと、大統領がこんなこと言ってくるとは！そうそう。ホントに、つい飲み過ぎてしまう。まあ、でもほどほどに！自戒の念を込めて、
次に古代ギリシャの抒情詩人アルカイオスの有名な言葉「酒は人間を映し出す鏡である」。むむむ、耳が痛い。飲んだら人の本性が出る。そう言えば、かつて新人の部下が酔っ払った際に一緒に飲んでた人たちから「常盤さん、どんな上司？」と聞かれて、そいつが「はい…(間をおいて)かわいいう上司です」と言いおった…それがヤツの本音だったのか…は、なんと威厳のない上司だ。

四杯目

▼酒にまつわる名言
お酒に関する名言はたくさんあるが、この四杯目で、いくつか紹介しよう。まずは、酒飲みにとって都合のいいものから。第十六代アメリカ合衆国大統領エイブラム・リンカーン「酒の害は酒



ときわ喜多